

そのギモンお答えします

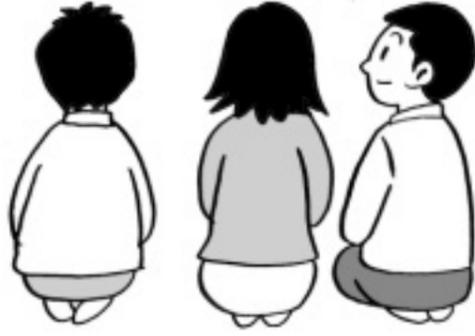
今月も本願寺新報の記事を紹介いたします。(最終回)
(全文そのまま)

まとめ

絵手紙の おわりに孫が あなかしこ

この川柳を見て、「『御文章』を知ってるなんて、幼いのに感心、感心」とピンときたアナタ。するどいんですね。法事やお説教で、僧侶が法話の最後に「肝要は…」と拝読するのが、「御文章」です。本願寺第八代・蓮如上人が門信徒に向けて著された手紙形式の法語で、上人はたくさん

の御文章を残されました。その結びにお書きになっているのが、「あなかしこ、あなかしこ」という言葉なのです。現代でも、女性が手紙の終わり(結び)のあいさつとして、「かしこ(恐れ多く存じます)」と書きますが、「あなかしこ」は「かしこ」に「あな」という感動詞をつけた言葉なのです。では、この



「あなかしこ」は単なる手紙の定型句なのでしょいか。上人が遺されたお言葉に、御文は如来の直説なりと存ずべきのよしに候ふ(御文章は、阿弥陀如来の直接のご説法だと思ふべきである)

とのお示しがあります。自らがしたためられたお手紙ですが、阿弥陀さまからたまわったみ教えを著しているの、「阿弥陀さまのご説法です」と感嘆されているのです。上人がお手紙を、「あなかしこ、あなかしこ」(ああもつたいない、ああかたじけない)と結ばれているのは、「あらゆるいのちを救う」と説かれた阿弥陀さまのご本願への感嘆のお心なのです。また、そのみ教えを共によるこぶ、お念仏の仲間の姿にもまた、「あなかしこ」と感動されたのかも知れません。

さて、お孫さんの「あなかしこ」。どんな思いで川柳に詠まれたのでしょうか。ご家庭の仏事で、「御文章」を一緒に拝聴されたのでしょうか。お孫さんに、こうしてみ教えのご縁が伝わっていること、おもわず目を細められたのかも知れませんね。

仏事には普段、なじみがないという方も少なくないかもしれませんが、でも、何かのご縁で仏事に触れて、ギモンに感じたり、発見があったり、「あるある」とうなずく中で、少しずつ身近になっていくのだと思います。ふとしたときに一句浮んだら、「川柳じいさん」に教えてください。あなかしこ、あなかしこ。

法語の世界

《原文》

皆人ごとによきことをいひもし、働きもすることあれば、真俗ともにそれを、わがよきものにはやなりて、その心にて御恩といふことはうちわすれて、わがころ本になるによりて、冥加につきて、世間・仏法ともに悪しき心がかならずかならず出来するなり。一大事なりと云々。
(『蓮如上人御一代記聞書』二百二十七)

《現代語訳》

「人はだれでもよいことをいったり、行ったりすると、仏法のことであれ世間のことであれ、自分自身がすでに善人になつたと思ひこみ、その思いから、仏のご恩を忘れ、自分の心を中心にしてしまう。そのために、仏のご加護から見放されてしまい、世間のことにも仏法のことにも、悪い心が必ず出てくるようになるのである。これは本当に大変なことである」と仰せになりました。

二〇一八(平成三十)年 金光寺報恩講のお知らせ

- 日時
- 十二月十五日 午前十時〜 日中法要(上下参り)
(九区・十三区・十四区地区)
 - 午後七時〜 速夜法要(お参り)
 - 十二月十六日 午前十時〜 日中法要(中央参り)
(十区・十一区・十二区地区)

- 講師
- 熊本教区 菊池組 照嚴寺副住職
 - 浄土真宗本願寺派布教使 高田 聡 信 師

その他
お参りの際は、門徒式章、念珠と聖典(お経本)をご持参ください。

報恩講期間中の日中法要(午前十時からの法要)にお仕事等でお参りできない方は、十二月十五日午後七時からの速夜法要にお参りください。

報恩講は、親鸞聖人のお命日を縁として、浄土真宗の門信徒が手継ぎ寺にそろって参詣し、阿弥陀さまのみ教えに出遇わさせていただく、**浄土真宗では一番重要な法要・法座です。**
是非、ご勝縁をお結びください。